

# 近世フランスの法と身体 : 教区の女たちが産婆を選ぶ

著者	長谷川 博子
学位授与年月日	2016-11-17
URL	<a href="http://doi.org/10.15083/00075032">http://doi.org/10.15083/00075032</a>

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 長谷川 博子

(筆名：長谷川 まゆ帆)

本論文は、フランス革命直前のアルザス地方南部の一農村で発生した助産婦の選任をめぐる係争事件を直接のテーマとする。出産・助産はそれ自体でも歴史研究の対象となりうる重要な問題だが、本論文の分析および議論は、いわゆる生活史もしくは社会史の枠組みにとどまるものではない。著者の長谷川氏はフランスにおける出産をめぐる歴史研究の動向のうちに本論文を位置づけた上で、厚みのある分析と議論を展開する。すなわち、フランス農村において民間医療として機能していた産婆による助産方式に対して、公式に制度化された助産婦による助産方式を代替しようとする王権の試みが18世紀に始まり、これが各地で既婚女性の反発を招いた一方で、本論文の対象とする農村では、他地域と違ってパリの国務会議に訴えが出されるまでに係争が激化したことが明らかにされる。この事件を分析するための補助線としてロレーヌ地方における類似の係争事件が取り上げられ、王権による助産改革の試みは、パリにおける産科学の発達およびそれを受けた「啓蒙主義的」な性格を持ったが、出産を控えた農村の女性にとって心身両面での深刻な脅威となっていた事実が各地の既婚女性の反発の深層にあったことが示される。さらに本論文の主テーマである係争事件の特殊性を説明するために、アルザス南部の社会経済状況および地方統治システムとそれらの変容が確認され、この係争事件は、こうした社会秩序の揺らぎを受けて激化していったことが論じられる。

長谷川氏は日本における出産・助産の歴史研究をリードしてきた歴史家であり、関連する業績は数多いが、本論文はかなりの部分が書き下ろしかならなり、また既発表の研究に依拠する場合も大幅な加筆がなされており、オリジナルな論考である。書き手と読み手双方の生の根源に迫るかのような鋭い問題意識、アーキビストの次元の作業とも言うべき詳細な手稿文書の分析、フランスを始めとするヨーロッパの中・近世史など内外の関連文献の博搜により、本論文は、出産を迎える女性の身体および生命観というミクロな問題を、人口動態、プロト工業化と農村経済の変容、国制と統治システム、さらには啓蒙の知といった近世ヨーロッパにおけるマクロな諸問題とダイナミックな形で関連づけることに成功していると言える。

なお、史料上の制約もあって提起された問いが完全に解決されたとは言いがたく、また本論とはやや関連性が薄いように感じられる記述も見られ、文章や構成にも推敲の余地が残されていると思われるが、全体として、日本の西洋史学界では依然として新しい研究分野である出産・助産の歴史研究を、高度な史料分析にもとづく射程の長い議論を展開することで大きく進めた野心作・力作として、本審査委員会は全員一致で、本論文が博士（文学）の学位に相当するものと判断した。